サステナブルな社会へ

～環境カウンセラーの挑戦～

⑦

環境カウンセラー、消費生活アドバイザー　浅野 智恵美 氏（愛知県）

「環境に配慮した持続可能な交通社会」の行方に注目

環境カウンセラー、消費生活アドバイザーとして講演活動などを行う浅野智恵美氏は、2001年に市民部門で環境カウンセラーに登録。生活者の視点からエシカル消費や食品ロス問題の大切さを幅広い世代に伝えている。エシカル消費では最近はサステナブルファッション等にフォーカスし、衣類のLCAについて考えるきっかけを提供する活動に注力する。また、愛知県豊田市在住ということもあり「環境に配慮した持続可能な交通社会」（EST）実現に向けた取り組みにも注目している。「若い人が気軽に環境カウンセラーを目指せるのが理想」とする浅野氏に、これまでの取り組みや今後の展望などを聞いた。

＊　＊　＊

――主な活動は。

環境カウンセラーとして自治体や小中高校などの学校、各種団体から依頼を受けて環境講座等を行っている。消費生活アドバイザーの資格も持っているので、それを活かした消費生活と環境両方に関連する食品ロスやエシカル消費に関する講座も多い。また、エコアクション21の登録・更新判定業務に長く携わっている。サステナ経営検定（CSR検定）1級を取得したことが中小企業の申請書類等を精査判定する際に非常に役立っている。そうしたこともあり企業からの講演依頼等も多く、最近ではアルプス技研の国内全拠点に向けたオンライン講座や、エコアクション21認証登録を受けている日本アルファの年1回の研修などで食品ロスをテーマに話をした。一方、愛知県刈谷市に本社を置く自動車部品メーカーのアイシンは2006年から環境学習プログラムに取り組んでいる。私も当初から企画メンバーに参加しており、毎年小学校等で環境学習を実施している。

このほか地元愛知での活動としては、刈谷市女性の会連絡協議会で1年間地域の方々が食品ロス削減に取り組み、現状調査やアンケート結果などをまとめ、市長を招いて報告するという取り組みがあり、その手伝いなどを行った。また、豊川市は各部署に地球温暖化防止推進員というリーダーを設けているが、先日そのリーダー職員の方々を対象に、地球温暖化防止とデコ活をテーマに講演したところだ。

――環境カウンセラーを取得したのは。

もともとは製薬会社に勤めていて環境の専門家ではなかった。環境をテーマにした論文が商品科学研究所で1992年に最優秀賞を受賞して、コラムの執筆や小学校などから環境についての講演依頼が来るようになり、それが環境問題に本格的に取り組むきっかけとなった。小中学校等で環境学習を担当していく中で環境カウンセラーの登録を受けている校長先生と出会い、勧められて2001年に環境カウンセラーの資格を取得した。

――環境問題の中でも最近特に注目していることは。

私はトヨタグループのお膝元である豊田市在住ということもあり、高度道路交通システム（ITS）と環境の関係に関心がある。環境に配慮した持続可能な交通社会（EST）がもっと進めば良いと考えている。昨年12月に富山市でITSシンポジウムが開催された。私は環境カウンセラーの立場でパネリストとして関わり、環境や生活者の立場から情報提供を行った。豊田市では以前からESTに関する取り組みが進められており、私も非常に関心を持っている。究極はCO_2を排出しないエネルギーを使った自動運転車が普及し、安全に誰でも行きたいところに行ける社会になると良いと考えている。一人ひとりのウェルビーイングを実現するためには、環境に配慮した交通政策は非常に重要だと思う。

――環境カウンセラーの現状や展望は。

環境カウンセラーは全体的に高齢化し、登録者数が減少しているようだが、ここ数年は徐々に若い世代の応募も増えてきているように感じる。しかし、この認定制度が一般に浸透しているかというとまだまだなのが現状だ。いま環境カウンセラー全国連合会などが中心となってYoutube等で積極的に配信を行っているが、そうしたところから情報や魅力が広がっていき、若い世代が積極的に、気軽に認定を目指すようになると良いと思う。例えばコンビニやファストフード、コーヒーショップの店員が環境カウンセラーの資格を持っている、となると社会全体の環境への関心が高まり、市民の行動変容につながると期待する。

――今後取り組みたいことは。

エシカル消費の概念はまだ十分に浸透しているとはいえない。広く認知してもらうための講座等を行っていきたい。エシカル消費のひとつとして、サステナブルファッションの問題がある。衣類が安くなってきたことなどで、日本では多くの衣服をクローゼットにしまい込み、1年間に一度も袖を通さなかった衣服の一人当たり平均は25着という調査結果が出ている。一方で衣類の製造は大半を諸外国に依存しており、生産現場で労働者に充分な賃金を払わないなどの課題がある。こうした現状や、衣類の製造から使用、廃棄までを考えるということをより多くの人に伝えていけたら幸いに思う。

（聞き手・黒岩修）